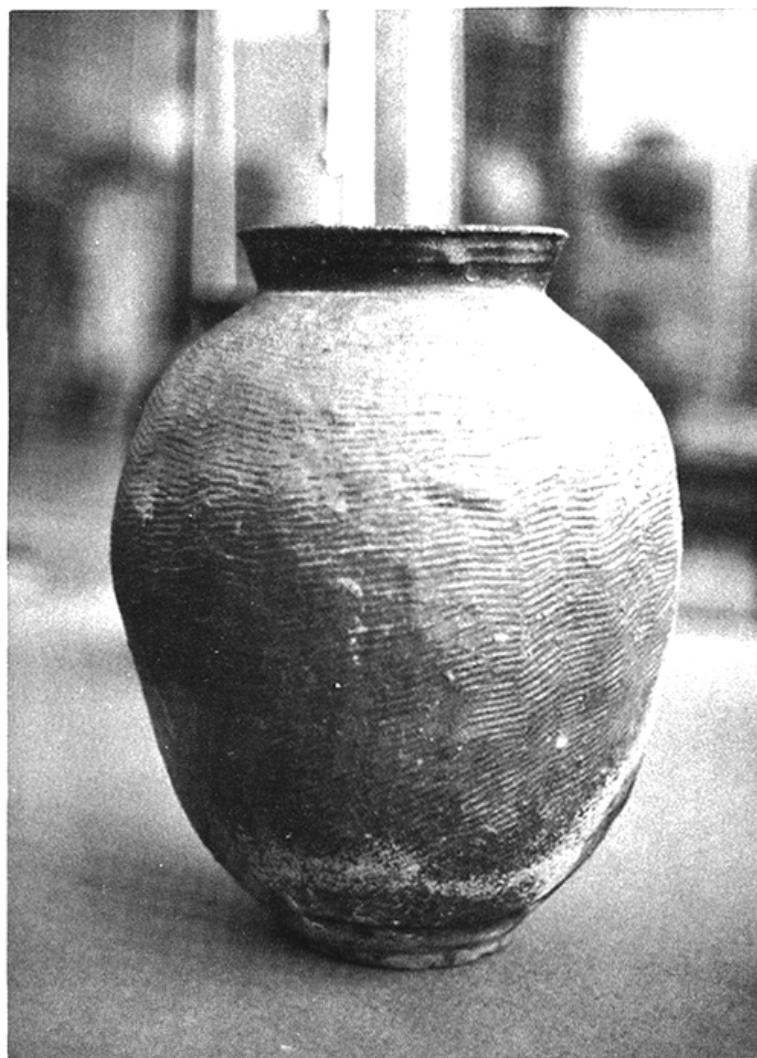


# 愛知の博物館

1975年 No. 21



愛知県博物館協会

表紙写真（珠洲叩文の壺）

## 珠洲のやきもの

能登半島の珠洲市には、平安末期・鎌倉初期から室町時代にかけての古址十数基が残されている。珠洲のやきものは、何れも珍らしい黒陶で、叩き文手法でつくられた強い個性を見せているものである。鎌倉時代までのものには、叩き文のもの・無地叩きのものの2種類があり、室町時代になるとその製法が変って、叩き文手法は見られなくなっている。

これらの遺品は、多く北陸地方の宗教遺跡から出土を見ることが通例になっている。須恵器に属するものであるが、一般の須恵器の用途とは異って、純日本的な宗教用品として用いられていることが珠洲のやきものの特質であると云うことが出来る。室町時代以降になると珠洲のやきものは、その姿を消していく。

解説 沢田由治

所蔵 近藤素生

## 目 次

モンキーセンター博物館学セミナーのこと	廣瀬 鎮・水野礼子	1
設立後の集成館	荒木 実	4
植物からの印象	磯野英男	5
昭和49年度 事業報告		7
昭和49年度 決算書		8
昭和50年度 事業計画(案)		9
昭和50年度 予算(案)		10

## モンキーセンター博物館学セミナーのこと

廣瀬 鎮・水野礼子

### ◎博物館学セミナーをはじめる

日本モンキーセンター附属博物館では、職員の自主的研究会をひらいて勉強をしようということになりました。

今から10年前のことです。この博物館の諸問題を中心に博物館自体を科学的に考求しつづけてきた日本モンキーセンター附属博物館、博物館学セミナーと呼ばれる研究会も昭和50年度中に100回をこえることになります。

研究会といいますと、何か大変固苦しいものを想像されるかも知れませんが、実はまことに楽しい、博物館をめぐる意見交換の場でもあり、情報収集の場となるように努力をしてきましたので、今日では、結構学芸職員にとって役に立つ研究会になってきております。モンキーセンター以外からの博物館現場の学芸員や、学校教育者の方が、気軽にでかけてこられ、研究会終了後も夕方おそらくまで色々と話しあったりすることが多くなりました。

はじめて、このセミナーを開設した頃は私ども学芸職員も、博物館そのものについての知識を充分にもっていたわけではありませんが、手はじめに、博物館の理念とするところ、博物館の基本的な機能などをまず、明確にする必要がありました。第一段階は、諸博物館論の吸収からはじめ、博物館の諸機能についての分析を試みましたが、そのために、日本を含めた世界の博物館の発達史を確実におさえるために時間をかけてみました。博物館学綱要や、博物館学入門は、いわば古典的な名著ですが、現実の日本の博物館は、これらの本の書かれた頃とずいぶんちがってきておりましたので、特に、各地の博物館へは、積極的に尋ね、現状の実態資料をえました。

次に、博物館自体の勉強では、海外の新らしい博物館の現状についての資料がまとめられていないので、ICOM(国際博物館会議)ニュースや、Museum, Curator誌なども文献としてとりあげました。展示・教育・調査・資料収集・保存という順に博物館のそれぞの専門機能の解明を目指として、月1回の開催でそれぞれ1年間をかけて、研究会を実施してまいりました。博物館学芸職員の仕事は、博物館にあっては、日々が実践ですがたえず技術的な話題も中心となり追求されてまいります。それだけに、1回毎のセミナーの話題提供者、講師の決定には苦心します。東海地方で活躍中の第一線の学芸員の方々にはしばしば無理をいってやってきて頂きました。当初は、予算もゼロで、当博物館部内研究会としてはじめられたものですから、外からの参加者は全く手弁当でやってきて頂いたものです。したがってこの研究会は、参加者の熱意に支えられ今日に到ったと申せましょう。近年では、一応予算化され、年間の企画担当者も決めて実施しております。

### ◎何を学び何を追求するか

今日、博物館研究を大別して、博物館理論Museology、博物館技術(Museography)の二分野の研究方向が示されていますが、博物館について追求すべきことは無限にあります。私どもは予算や、時間の制限を頭におきながら当初からのセミー主義、学習主義をつらぬいてきました。東上西下の途中駅である名古屋の地理的な強味もあって、何かのついでにかこつけて、セミナー講師を依頼してまいりました。幸いすぐれた話題提供者を多く得てきました。

これまで、90回におよぶセミナーの中で印象に残っている研究会がいくつかあります。最初の頃は、昭和41年の第11回セミナーで、現在愛知県東栄町御園天文科学センター所長である金子功先生から、「中国地方の博物館」について御紹介ねがったのですが、これがきっかけとなって全国の博物館の展示や教育活動をとりあげたいわゆる「博物館展示紹介」が大いに关心をよび、その後長く企

函継続されました。これによって私共の展示をみる力も養なわれてきました。この金子先生の博物館紹介は、国内からやがてヨーロッパ、台湾、韓国へと発展して行きました。当セミナーでは、博物館展示については、ソ連、南米、アメリカ合衆国等の博物館の展示を実際に見学してきた方から直接的に紹介してもらいました。したがって、博物館展示の評価基準などが、この間しばしば討議されたものです。41年度のセミナーでは、展示照明をめぐってつっこんだ研究会を実施しましたが、丁度当所では夜行性のサルの展示が始まられたので、動物の飼育展示と照明、効果などについて中部電力㈱の山田正孝氏を講師として論議を活発に展開しました。防錆、防湿、防虫、はては資料の修理などの博物館技術にまで研究テーマがひろがっていました。

博物館は自然系、人文系とその種類も多いのですが、当セミナーでは、特にこの区分にこだわらずによい仕事をしておられる館園に焦点を合わせ、植物園・水族館・美術館・科学館等についてそれぞれの博物館の機能毎にその特色となる問題点をとりあげてまいりました。セミナーも2年度以降からは、博物館諸機能の分析に力をいれましたが、外部参加者が1名もなく所内職員だけという会合もありました。多忙な各博物館の学芸員の方々に出席ねがうことは今日でもむずかしいと思っています。5年度以降は主として、博物館の科学的分析を目標として、運営、組織、施設、予算、企業性などを問題にしてこの数年間は、博物館自体を解剖して、博物館問題を追求考察してまいりました。

#### ◎セミナーのすすめ

自分一人の力ではとうてい果しえない学習を多数の協力をえて今日まで進めることができたことは幸いです。年度毎の当所担当学芸員は、企画に個性的な才能を發揮してきましたが、企画立案から実施まで、そしてその評価まで一貫した責任を有しますので、厳しい仕事であると思います。博物館内における自主的研究会の開催運営というものについては、かなりむずかしい問題が内在しているとききます。職員参加、開催時間、研究テーマ、研究成果など、館内外の問題とからみ研究会活動の推進にはまだ検討をする課題があるからでしょう。しかしながら博物館が一人でも多くの見学者をえて、最大限の博物館サービスを奉仕的に実行して行くためには、やはりこうした博物館自体をよく知り、博物館人は何をすべきかを考えつづける研究会は必要だと思わざるをえません。博物館が、体質を更に改善して行くためにも、仕事への熱意が人倍のものとなるためにもこうした研究会の開催をのぞむものの一人です。私共は、博物館内での研究会活動があらゆる博物館でも活発にひらくされることを望んでやみません。過去90回以上のセミナーのすべてを御紹介することは困難ですから、以下に49年度のセミナーを担当した水野礼子学芸員に49年度をふりかえって紹介してもらいます。この研究会をもっともっと巾ひろい層の方にも活用して頂ければ幸いです。

日本モンキーセンター学芸部部長 広瀬 鎮

#### ◎昭和49年の博物館学セミナーの実践過程

49年4月26日 第86回

○昭和49年度セミナー構想

日本モンキーセンター 水野礼子、広瀬 鎮

○博物館における教育教材の開発研究

日本モンキーセンター 三戸幸久

49年8月9日 第87回

○学芸員と博物館活動

名和昆虫博物館 岩渕 修 藤原岳自然科学館 菅 牧子

○I C O M会議の方向性

濃飛甲冑研究所 吉田幸平

49年9月25日 第88回

○学芸員活動の実践報告

資料整理をめぐって 名古屋市博物館（準備室） 西田躬穂  
教育事業の実施 市立名古屋科学館 三輪 克

49年10月25日 第89回

○学芸員の博物館活動実践

第5回熱田神宮文化史展について 热田神宮宝物館 宮田清人  
○第22回全国博物館大会をめぐって 日本モンキーセンター 広瀬 鎮，大竹 勝

50年2月1日 第90回

○自然史博物館の資料整理の方向性

アメリカの自然史博物館の資料をみて 横須賀市博物館 柴田敏隆

50年3月1日 第91回

○博物館設置基準論 博物館の設置及び基準の問題 日本モンキーセンター 広瀬 鎮

50年3月26日 第92回

○アメリカ博物館における展示の最近の傾向 市立名古屋科学館 三輪 克

◎49年度をふりかえって

この1年間セミナーを担当して毎回どんな話題をとりあげたらよいか、どうしたら多くの人々に集まってもらえるか等をあれこれ考えてやってきました。その間、困ったこと、やりにくかったことをお話しして今後の目標にもふれてみたいと思います。まず私の関心事の一つであった動物園について、獣医、飼育技術員から問題を提供してもらい動物園における展示、教育活動について深く追求するつもりでした。しかしながら早い時期にそのまま続けることのむづかしさにつき当りました。今まで、博物館の問題として各館共通の話題などあつかった場合には各館からの出席者もずいぶん多くあったのにくらべて、動物園問題をあつかった折の出席者が減ってしまったことです。それは何が原因なのでしょうか。博物館界においての動物園・水族館・植物園等の存在が特異なものとみられているからかも知れません。博物館大会等において自然史系博物館の仲間入りをして十分話題提供もなされ討議もされてきたにもかかわらずなぜ当セミナーの場合はうまく行かなかったのでしょうか。地方的な現象かも知れません。県下において自然史系博物館に対する関心度がひくいからだとも思っています。

特に現在強く望まれていることの一つである自然保護に博物館関係者が関心度が低いことは残念です。というのも私ども動物園側からしましても人文系博物館の方々の御意見も多いに参考にさせて頂かねばならないからです。さらに、いかにしたら多くの方々に集まっていたらいいかということです。人が多いから良いというわけでもありませんが、前にものべましたように当セミナーはなるべく幅広く色々な問題をとりあつかうことを目標にしてやってきましたし、それには学芸職員、事務職員を問わず共通の話題をもてるよう努力しなければなりませんでした。題名を決める時はずいぶん苦労しました。内容とくいちがった題を付けたため参加されておどろかれた方もきっとあったことでしょう。研究会の内容をすばり、表現しうる魅力ある標題をきめることも一つの技術のように思えたくらいです。

49年度に開催しましたセミナーの中で印象にのこりましたのは、第87回セミナーの「学芸員と博物館」でその年、新らしく学芸員として就職されたばかりの二人の学芸員さんにお話を頂いたのです。その時特に強く感じたことは、学芸員はやはり、何でも体験してみることが一番なのだということでした。デスクワークだけでは、身につくことも半減されてしまうのではないかと思いましたし、足や目でかせがなくてはならないとつくづく思い、このフレッシュな学芸員さん達に、力強さ、そして気持のよいものを感じたのでした。50年度セミナーを再び担当しますので、とくに今後のセミナーで

は、① 学芸員の現場、現状からの意見 ② 各館共通の話題を中心に討議 ③ 博物館の理論と実践 ④ 学芸員の職能等を中心としてユニークな研究会をひらいて行きたいと考えています。御支援をよろしくお願ひします。

日本モンキーセンター学芸員 水野礼子

## 設立後の集成館

荒木 実

私は昭和30年に博物館を“自分の力で建たい”と願ってから、やっと14年目の正月に勇気を出して建立することに決め、約2年間建築屋さんと共に私の予算内で少しづつ完成して行き、遂に昭和45年10月31日開館の運びとなりました。私の喜びは勿論でしたが、まわりの人々から一中学の教員でよくやったと賞賛の連続でした。そうした夢のような日々からもう4年半の月日が流れてしまいました。この間に私の歩いてきた道をふり省みると、全く平々坦々な路ではありませんでしたが、廣瀬鎮先生の「博物館は生きている」になれるよう、ミニ博物館とはいえ一戸の建造物の役割をたしかにはたしていることに今更のように重みを感じました。開館以来社会科学と自然科学を2か月ずつ交代して、収集保管研究しておられる社会人の方々にお願いし展示して載いております。この中には故人になられた方もあり見学のパンフレットが収集資料のリスト作りもしていた事を知りました。又展示に際して今迄の調査研究をまとめて小冊子を作られた方もあり、今は観覧者であるがやがて展示者に変るのだと希望をもって励んでおられる若い人の声が聞えて来ます。展示者、観覧者そして私と共に大きく社会教育の場を提供していたのです、即ち博物館の使命が建物を通して伝って來たのです。私は学校での教育者としての使命は25年で終わりましたが、今は老境に入り社会の教育者になりつつあることに気付いてきました。荒木集成館がもっともっと多くの方々に利用されるよう更に努力を重ねていく覚悟です。さて4年半の結果をまとめて見ますと、

年	月	№	題名	日数	観覧数	パンフ売上数	図録売上数
45	11～1	1	荒木集成館開館記念展	28	419	153	154
46	2～3	2	藤正彦化石コレクション展	16	491	225	52
	4～5	3	丹羽主税考古遺品展	18	354	80	43
	6～7	4	吉田富夫考古学収集展	17	324	79	29
	8～9	5	琉球先島諸島生物展	20	511	181	36
	10～11	6	成田陽カツムリ収集展	18	419	152	23
	12～1	7	三渡俊一郎名古屋市南区考古遺物展	16	215	28	5
47	2～3	8	熊崎憲次鉱物展	16	372	68	7
	4～5	9	内山邦夫考古収集展	18	429	47	39
	6～7	10	福原穂シダ植物展	18	403	37	8
	8～9	11	柚木和夫考古歴史地理民俗蒐集品展	16	268	23	8
	10～11	12	天野一義海藻展	18	368	109	7
	12～1	13	蓑虫山人考古展	16	245	64	4
48	2～3	14	トリオ化石展	16	448	167	18
	4～5	15	長谷川寅二石器展	18	409	55	40

	6 ~ 7	16	小林嘉康, 食虫植物と水草展	19	453	199	80
	8	17	北川 武, 蝶コレクション展	8	195	13	6
	9 ~ 10	18	田中稔考古資料展	20	293	44	21
	11 ~ 12	19	荒木 実鉱物コレクション展	16	201	27	6
49	1 ~ 2	20	和田英雄, 春日町遺跡資料展	19	358	173	25
	3 ~ 4	21	井波一雄, 雜学植物志展	18	426	172	38
	5 ~ 6	22	中山 清貝類展	18	472	60	22
	7 ~ 8	23	見晴台遺跡出土品展	17	372	114	36
	9 ~ 10	24	湯浅四郎郷土陶磁展	17	343	88	12
	11		名古屋地学会合同展示会	3	122		
	11 ~ 12	25	北村斌夫考古展	18	237	181	4
50	1 ~ 2	26	東海地方の古生代の化石展	17	527	147	品切

<荒木集成館館長>

## 植物からの印象(インスピレーション)

磯野英男

僕が植物が好きですと言うと、大勢の人はそれはいいですね花はきれいですからとか、盆栽でもおやりですかは良いとしても、年よりくさいものをおやりになっています等と人は言うが、実際は僕が植物に対して持っているのは少し違うものです。確かに花はきれいで、美しくて見ていて気持が良いものです。僕も最初は、そんな動機からか五才頃から花を相手に土いじりをやっていたのを憶えています。

しかしそのうちに栽培して気がついたのですが、植物と言うのは非常に未知の部分が多いと思ったと同時に恐しいような気がしてきた。それは植物は動物と違って動く事が出来ないとか話すことが出来ないと思っていたのが、ある意味では動く事も出来るし、話す事は出来なくとも何らかの意志伝達方法を持っているとわかってきた事からである。植物が運動することは、チャールズ・ダーウィンによって、すべての植物の蔓が独自の運動力を持っていると証明されている。このことは、じっくり観察すれば、確かに植物は動いていると一般の人でもわかると思う。動いているのを植物が成長しているのと感違ひする人がいるが、それは、植物の芽が地上に伸び根が土の中に伸びるのを光のせいだけだと思っているのと同じで、光とは無関係にまっ暗な場所でも芽は上に伸び、根は下に伸びる。では何故芽は上に伸びるかと言うと、それは重力に対して植物が反応しているからである。この事はトマス・ナイトが150年前に証明した事です。更に考えると植物は、子孫を殖やす為に種子を作るが、この種子による移動によって植物は歩かずに、あちこち移動する事が可能なのです。僕の経験によれば、自分の庭に山もみじの若木がいつのまにか生えているのに気付き驚いて周囲を見ましたが、山もみじはなく、それで詳しく周囲を調べたら直線にして1キロメートル位離れた神社で見つけましたので、ここから風に乗って種が飛んで来て生えた事がわかった次第です。もみじの種は良く風で運ばれると聞

いていたが実際良く遠くまで飛ぶものだと思いました。この種子移動と言うのは、ある意味で物質伝送機の原理みたいな気がする。物質伝送機はまだ出来ていないが、物体をある地点からある地点に瞬間に移動する機械の事である。種も成長すれば親と同じになるのであるから瞬間的には出来なくても物質の移動方法としては、一考の必要があると思う。

さて植物の意志伝達方法ですが、これはこんな事を言うと頭がおかしいのではないかと思われるのだが、バクスター効果をまだ知らない学生の時山や野原へ行くと、その植物が僕に見てもらいたいと呼びかけているような気がしてならなかった。事実植物にくわしいと言っても高さ2センチ位しかない食虫植物のミミカキグサがすぐに見つけられるとか、サイクリングしていて野原の方を見たら何か感じるところがあったので自転車を降りて行くとこれも食虫植物のイシモチソウの大群落を見つけた事もある。一番面白いのはイブキジャコウソウ（別に珍らしい草でもなく、むしろ高山へ行くとよくある草ですがこの草は変っていて高山の2,500メートルから海岸まで、非常に適応性がありそれでいて高山でも平地でも形体が変わらないので研究の余地があると思う）という高山性植物を一度見たいと思って伊吹山に多いと聞いたので行ってみたが見ることができず、いつも頭の中で一度見たいと念じていたら八方尾根を登山していた時、何か岩の向うにインスピレーションを感じ行ってみたらそこにイブキジャコウソウがあったので驚いた事がある。そこでバクスター効果の事ですが、近頃はやりの超能力ブームとかで日本にも紹介されてきました。それは1966年にアメリカの嘘発見検査官のバクスターがドラセナの葉に嘘発見器をつないで根に水をやると葉に影響が現われるかどうか調べようと実験していたら、驚いた事にドラセナはバクスターの心を読み取る事が出来たのです。と言うのはバクスターがドラセナを燃やしてやろうと思った時にドラセナにつけた嘘発見器が反応したのです。そしてこの実験はアメリカに於て沢山試みられ心を読み取るかどうかは別問題として植物は人間に対して確かに反応を示す事が立証されたのです。そもそも植物・動物・無生物とか言ってあまりに大げさに分けて考えるのが何か違うのではないかと言う気がする。生物そのものがアミノ酸から合成されて出来たと言われるが、もしそうだとすると植物も動物ももちろん人間も元は同じなのだからそこには今までに発見されていない伝達方法があるのではないかと思われる。さらに、「星の合図が美しい花を咲かせる」と言われるように地球の生物が天体に影響される事は分っているのですが、さて何故だろうという事になると良く分らないのが現実です。植物でも高山性の植物の方が天体活動と言うか、生物時計と言うか確かに外部に対して鋭敏です。それは厳しい気候の条件下で育っている為かとも思います。日本の高山植物にもまだ雪があるので雪をどけて芽を出す草もありますが、アルプスのチロル地方に咲くサクラソウ科のソルダネラ。ブシラは雪を生長する時の熱で溶かして頭を出して花を咲かせるものもあります。このような植物になると温度の変化、日長の長さ等という季節の変化からではなく植物自身の生物時計でしか考えることが出来ません。このように超能力やUFOが今だに解明出来ないのと同じく植物も沢山の未知の部分が残っています。

<愛知県文化会館職員>

## 昭和49年度 事業 報 告

### 1. 研修会の実施

○日 時 昭和49年12月13日(金)から14日(土)まで  
○会 場 愛知図書館視聴覚室  
○講 議 「学芸員養成研修会」  
ア、「博物館学」 横須賀市博物館  
柴田敏隆  
イ、「社会教育学概論」 日本モンキーセンター附属博物館  
学芸部長 広瀬 鎮  
ウ、「教育原理」 市立名古屋科学館  
学芸員 滝本 正二  
参 加 者 7館外 27名

### 2. 印刷物の配布

- (1) 博物館パンフット  
県下の博物館施設及びホテル等に配布
- (2) 機関誌の発行  
「東西南北」 46.8.0 ~ 46.9.1  
「愛知の博物館」 46.2.1

### 3. 文化財探勝の会」 実施

日 時 昭和50年3月16日(日)  
探 勝 先 徳川美術館 博物館明治村  
参 加 者 名古屋市内小、中、高校教員外 31名

### 4. そ の 他

総 会 昭和45年5月17日(金)  
理 事 会 昭和49年9月30日(月)  
実行委員会 昭和49年7月30日(火)

## 昭和49年度 決算書

## 収入の部

愛知県博物館協会

費目	予算額	決算額	差引過不足	摘要	要
会 費	40,000円	40,000円	0円	28館	
会費助成金	30,000円	30,000円	0		
加盟館負担金	28,000	25,600	△ 2,400		
参加者負担金	30,000	40,500	10,500	研修会 1,000円×25名 文化財探勝会 500円×31名	
雑 収 入	3,000	2,780	△ 220	預金利子	
繰 越 金	9.045	9.045	0	前年度からの繰越金	
計	410,045	417,925	7,880		

## 支出の部

費目	予算額	決算額	差引残額	摘要	要
研修会費	30,000円	37,090円	△ 7,090円	1回	
印刷製本費	19,900円	23,840円	△ 3,940円	博物館パンフレット10,000部×14円 「東西南北」№80～№91 「愛知の博物館」№21	
「文化財探勝会」費	85,000	72,700	12,300		
会議費	32,500	20,620	11,880	総会 1回 理事会 1回	
事務費	35,875	21,445	14,430	郵送料	
負担金	10,000	10,000	0	東海博負担金	
予備費	17,670	0	17,670		
計	410,045	400,255	9,790		

差引残額 17,670円は50年度へ繰越

## 昭和 50 年度 事 業 計 画 (案)

### 1. 研修会の実施 年 2 回

博物館関係施設に勤務する職員を対象に行なう研修

### 2. 印刷物の配布

ア、機関誌の発行 「東西南北」 月 1 回

「愛知の博物館」 年 1 回

イ、P R 用印刷物の作成

### 3. 「文化財探勝の会」 実施年 1 回

教職員を対象にし、県の文化財めぐりを行なう。

### 4. その他

総会を年 1 回、理事会を年 2 回程度行なう。

『愛知の博物館』 No.21

発行日 1975年3月

発行者 愛知県博物館協会  
名古屋市東区久屋町8-8  
愛知県文化会館内（電052-971-5511）

編集者 愛知県博物館協会事務局